

# ねりま小中一貫教育レポート

〇●〇 第 14 号 〇●〇

平成 25 年 2 月

発行：教育企画課・教育指導課



2月8日（金）、小中一貫教育校大泉桜学園の研究発表会が開催されました。寒風の中、200人以上の区立学校の先生方をはじめ、保護者や地域の方、他区市教育委員会の方など400人以上の人が参加しました。北海道や九州など遠方からの参加もあり、大泉桜学園の取組が注目されていることを反映した研究発表会となりました。

## ◆四つの分科会で、小中一貫教育校の取組を紹介

(1)教務部からの報告（第1分科会） 講師：小平市立小平第一中学校長 五十嵐浩子先生

○校務分掌組織・・・小中一貫教育校として必要な部会を検討し、教務、生活指導、特別活動、進路学習指導の4部会に組み直した。4～9年生の委員会活動・クラブ活動は特別活動部、5年生以上の部活動については生活指導部が担当することとした。

○教科部会・行事等の委員会・・・すべて合同とした。

○期ごとの組織・・・Ⅰ期（1～4年）・Ⅱ期（5～7年）・Ⅲ期（8・9年）ごとに3人の副校長の担当と期長を定めた。

○企画委員会・・・校長・副校長、分掌主任、養護教諭、事務など12名が毎週火曜日1校時に集まり、懸案事項や職員会議の議案を確認している。

○電子データの共有・・・フォルダを共有化し、電子データを一括して同一のフォルダに保存した。通知表や指導計画などもすべて同じ形式に統一した。

○生活時程の工夫・・・東校舎（1～4年）は45分授業、西校舎（5～9年）は50分授業とした。5・6年生は、これまでの45分授業から50分授業としたため、一般的な小学校にある20分の中休みをなくした。

○入学式・卒業式・運動会・桜祭（音楽会）・・・すべて合同で実施している。

○ブレ7年生・・・6年生は卒業式のあと、修了式の日まで「ブレ7年生」として、9学年を担当していた教員から中学校の授業のオリエンテーションを受ける。

○英語活動・・・3・4年生で「総合的な学習の時間」の国際理解教育と余剰時間を活用し、JETやALTと担任により20時間ほど実施。25年度からは1・2年生も行う予定。

(2)特別活動部からの報告（第2分科会） 講師：目白大学教授 小林福太郎先生

- 特別活動部の経緯・・・学校全体で動くことの多い小学校と学年単位で活動することの多い中学校では、特別活動の運営方法に違いがあり、開校1年目は、それぞれが主張し合い、調整にかなりの時間を要した。
- Ⅰ期のたてわり活動・・・1～4年から2～3人ずつ、計12人前後のたてわり班を22班づくり、たてわり遠足、たてわり班遊びなどの活動を行っている。班長となる4年生はもちろん、サブリーダーの3年生、1年生のお兄さんお姉さんとしての2年生も、大きく成長している。
- Ⅱ期・Ⅲ期のたてわり活動・・・校庭で行う飯盒炊さん、児童・生徒会活動を5～9年生合同で実施している。
- 委員会活動・・・今年度は、東校舎は4年生、西校舎は5・6年生全員＋7～9年生の学級代表で委員会活動を実施している。4年生で委員会活動を経験したあと、5・6年生の委員会活動から、7～9年生の学級代表制へ移行する方法も検討している。

(3)生活指導部からの報告（第3分科会） 講師：千葉大学教授 天笠茂先生

- 期別朝礼・・・全校朝礼の他に期別朝礼を実施している。発達段階に応じた講話や4年生、7年生などの司会進行による発表や報告を行っている。
- 学校のきまり・・・両校にあったきまりを基に、1～4年生と5～9年生で分けて、小中一貫教育校としてのきまりをまとめた。5・6年生は7～9年生と同じきまりで生活しているが、シャープペンシルは不可として鉛筆を使用するなど、小学生としてのきまりを残している部分もある。
- 標準服・・・1～6年生にも儀式的行事には標準服またはそれに準ずる服装とするよう指導している。25年度には、標準服の全員着用をめざして日常生活から標準服に準じた服装となるよう各家庭に協力をお願いしている。
- 部活動・・・5・6年生の部活動参加では、5年生の25%、6年生の62%が参加している。体が十分に成長していないことに配慮して活動内容を変えたり、小学生用のボールを購入するなどの工夫をしている。
- 交流給食・・・年間を通じて複数学年の交流給食を行っている。時程の違いから、配膳は下級生が行い、片付けは一緒にやっている。

(4)進路学習部からの報告（第4分科会） 講師：早稲田大学大学院教授 菅野静二先生

- 大泉特別支援学校との交流・・・特別支援学校の開校以来、31年継続している交流で、1～6年生は学年ごとの交流、7・8年生は特別支援学校の中学部生徒の状況に応じたグループ交流を年に2～3回実施している。相手の表情から気持ちを読み取るなど

の成果とともに、高学年になるにつれて意識の変化が出てくることや、交流学习で学んだコミュニケーション力を日常生活に活かすことなどの課題もある。

○キャリア教育…1年生からキャリア教育を意識して取り組んでいる。東校舎の最高学年である4年生が委員会活動やたてわり班活動、いわゆる2分の1成人式の「虹をわたろう」などを通して大きく成長した。5年生からは職業に関する学習を始め、7年生の職業に関する発表を5年生が聞いたり、8年生の職場体験を6年生が見学してインタビューするなど、Ⅱ期の学習の充実を図る工夫も行っている。

○Ⅱ期の学習

①5年生からの50分授業…小テストやまとめの時間をしっかり確保できるように、児童アンケートでも6割以上の児童が50分授業を好意的に捉えていた。反面、1～4年生と時程が異なるため、専科の教員が授業できる時間割が固定され、時間割の変更が難しくなる面もあった。また、50分授業により中休みがなくなったことへの対応として、朝遊びの時間を増やした。

②一部教科担任制…5年生で社会・理科・外国語活動、6年生で社会・理科の一部教科担任制を導入している。5年生のアンケートでは、9割近い児童が担任以外の授業について好意的な回答をしている。

③期末テスト…5・6年生の教員が試験問題を作成したが、市販教材を利用すると単元の終わりに行うテストと重複してしまうなど、作成に苦労した。

○7年生の新たな役割…4年生は大きく成長したが、7年生が小学6年生の延長のような姿に見えるときもある。「どのような7年生にしたいか」という視点を大切に、小中一貫教育校における望ましい7年生の姿を構築したい。

○命の教育…「いのちきらきらカード」「大泉桜の里での米作り体験」などを通して取り組んでいるが、まだ9年間の系統化ができていない。今後は「命の教育」についての発信も強化したい。

#### ◆全体会：シンポジウム

吉村教育指導課長をコーディネーターとし、4名の分科会講師がシンポジストとなり、分科会の報告や大泉桜学園の教育活動の充実に向けた提言をいただいた。

①授業改善による学力向上

様々な異学年交流の取組などによって、子供たちの雰囲気がとてもよくなった。今後は、指導法の工夫改善などにも取り組んで、学力向上につなげてもらいたい。



## ②情報の発信

小・中学校が協力して一緒に取り組めば、こんないいことがある、と大胆に発信してもらいたい。大泉桜学園の取組を活用して、施設が分離している小・中学校でできることに転換していくという流れもできてくる。

## ③新しいカリキュラム開発

4-3-2の区切りで進めると、6年生の活躍の場はどうかという声が出る。これまでは小学校6年間を前提としてきたからそういう話になる。4-3-2の区切りの中で6年生をどうするかと捉え直してはどうか。4年生でI期のリーダーを経験したあとの5・6年生は、今までの5・6年生とは違ってくる。I期で育てた4年生を5・6・7年生でどう育てるか、新しいカリキュラム開発が必要である。

## ④命の教育

命の教育は「生き方」の学習であり、自らの命の役割を自覚し、困難を乗り越える力を育成する教育である。8・9年生になったら、職業に対する夢から、その職業について何をしたいのか、どう社会に貢献したいのかと考えさせて志を引き出してほしい。

## ⑤小中一貫教育の効果の検証

教育委員会として、小中一貫教育校における取組の効果を検証していくシステムをつくる必要がある。

## ◆アンケートから

- 小学4年生の頑張りに驚いた。2分の1成人式を東校舎の「送る会」（卒業式）と位置づけるのは、なるほどと思った。第Ⅱ期をどうするのが課題とのことだったが、まさに小中一貫教育の要となる3年間だと思うので、今後に期待したい。（小教員）
- 6年生の役割や在り方が今までと変わっても、子供は柔軟に対応できると思う。保護者や教員の意識を変えることが一番だと感じた（小教員）
- 中学校籍の教員が、どの程度6年までの学習内容や指導法を理解しているのか、理解するための研修などの時間確保はどうなっているのか気になった。（中教員）
- 9年間で学力をつけるための、各教科の一貫性（カリキュラム）について知りたい。（小教員）
- 4年生が自立した若者になるための人格的鍛錬の大事な学年となること、小学校6年生が小学校のリーダーというこれまでの固定観念から脱することなど、思いを新たにしたい。（青少年委員）

大泉桜学園では、研究発表会で明らかになった課題を整理しながら、次のステップにむけて、新たな研究の検討を始めています。「スクラップ&ビルド」で、小中一貫教育校ならではの「生きる力」に向けた取組を進めていきます。